

光源氏へ視線を向ける夕霧

——『源氏物語』における夕霧の役割——

田 中 希 美

はじめに

夕霧は「葵」巻にて誕生する、光源氏の表向き長男である。「少女」巻で元服するが、光源氏の教育方針のもと六位に任じられ、大学で学問に励むことになる。しかし夕霧は秀才振りを発揮し、「少女」巻末で進士に及第、六位を早々に脱出すると、その後は順調に出世を重ねていく。成長した夕霧は、朱雀院が「まことにかしこき方の才、心用ゑなどは、これもをさをさ（稿者注：光源氏に）劣るまじく、あやまりても、およすけまさりたるおぼえ、いとことなめり」（四―二六）と評するような、有能な政治家となった。

このように光源氏栄華の一端を担う夕霧は、視点人物的役割を持つことが指摘されている。伊藤博氏は、「野分」巻に夕霧の視点が現出していると指摘し、「光源氏の世界に対して、ある反乱的座標をすら抱えこんだ存在が設定され、物語は、その視点から照射した情景を含み込んで来る」とされる。また、高橋亨氏は夕霧を「物語の表現構造において視点人物」であり、「物語世界内の主体的な行為者であるよりも、視つづけることを性格として引きうけているという意味で（認識者）」とされる。

夕霧の目と主観を通じた光源氏や六条院が描かれること、さらには夕霧が見聞きしたことに基づいて思考を展開し、公にされない事情などを推し量り批評することは、『源氏物語』中ではたびたび見られる。ではその夕霧の特徴にはどのような意義があるのか。本稿では、光源氏へ視線を向ける夕霧について考察することで、『源氏物語』における夕霧

の役割を明らかにしたい。

一、「まめ人」夕霧による六条院垣間見——父の宰領する世界への憧憬——

夕霧は自他共に認めるように、「まめ」という性質を一貫して持つ人物である。「少女」巻において既に「おほかたの人柄まめやか」（三二―二八）な若君として描かれ、正編も終わりに近づいた「夕霧」巻でも「まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将」（四一―三五）とされる。

「まめ」にはまた、「恋愛関係では、『あだ』『すき』に対して、好色でない意」⁴がある。夕霧もその通りで、若い頃は幼馴染の雲居雁のことを慮って一人も恋人を作ろうとしない。また、実姉と思いきや、貴公子達の関心の的になっている玉鬘に対する態度は「すすすすくし」（三二―一七五）く、内大臣の息子が夕霧に玉鬘への仲立ちを頼みたいと思ってもそっけない。恋愛に対して距離を置いているような姿勢が夕霧には見られる。光源氏は『あだめき目馴れたるうちつけのすきすきしさ』などは好まない本性とあわせて、『心づくしなることを御心に思しとどむる癖』をもち、「矛盾を内包しつつも、すべてを包摂する心の幅の広さがその理想性」⁵となつたが、夕霧にそのようなことはない。

このような性質を持つ夕霧が、恋愛物語の英雄である光源氏の宰領する六条院を垣間見するのが「野分」巻である。まず夕霧は、紫の上を垣間見する。

御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高きよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき権桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。（三二―二六四・二六五）

夕霧は紫の上に目を奪われ、彼女を樺桜に喩えて絶賛している。その後生涯にわたって慕い続けることになるのだが、彼の受けた衝撃は並大抵のものではない。

しかし夕霧は目を奪われる一方、光源氏のことを合わせて考えてもいる。紫の上の美貌に接した夕霧は、「大臣のいとけ遠くはるかにもてなしたまへるは、かく、見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、至り深き御心にて、もしかかることもやと思すなりけり」(三十二・二六五・二六六)と頭をはたらかせている。即座に幼い頃から父の隔ての意図を覚るのである。夜になり、三条宮で横になつても夕霧は感乱し続けているが、雲居雁のことさえ差し置いて紫の上の面影が忘れられないことについては「こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、いと恐ろしきこと」(三十二・二六九)と思考を止めようとしている。「禁忌の犯しへの予感ほ、『いと恐ろしきこと』とすぐさま判断してしまふ夕霧の場合、その身の上に現実化する余地はない」⁶との指摘がある。紫の上がいかに美しくとも、夕霧にとつては「父の妻」との密通の可能性がとても恐ろしいのである。

また、夕霧の物思ひは、光源氏の女性観へ及ぶ。これも垣間見た光源氏と紫の上の夫婦仲を踏まえて花散里に同情しつつ、彼女を見捨てない光源氏の偉大さを思うのである。

かかる御仲らひに、いかで東の御方、さるもの数にて立ち並びたまへらむ、たとしへなかりけりや、あないとし、とおぼゆ。大臣の御心ばへをありがたしと思ひ知りたまふ。(三十二・二六九)

紫の上への狂おしい物思ひの最中であつても、夕霧の思考は六条院の支配者である光源氏へと行き着いていく。とどまつまり、夕霧は紫の上の存在を光源氏と切り離して捉えられないのだ。

その後夕霧は関心を紫の上二人に留めず、続けて玉鬘を見る。そして最後に紫の上や玉鬘と比べてみたいと思ひながら明石姫君を垣間見し、「かかる人々を、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや、さもありぬべきほどながら、隔て

隔てのけざやかなるこそつらけれ」(三二二八五)という結論に至る。夕霧は紫の上を見たことで、とりどりに美しい女性のいる六条院全体へ関心を広げていく。心苦しく思っているのは、光源氏の「けざやか」な隔てである。六条院を光源氏宰領のものと捉えているのである。

心を惹かれた女性を光源氏の妻として捉えるという点は、後に女三宮を垣間見し密通した柏木も同様であるが、柏木が女三宮を垣間見した際に思っていたことは、「夕影なれば、さやかならず奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し」(四一四一)ということばかりであった。またその後、柏木の関心は女三宮へのみ向かい、光源氏の女三宮への扱いをなじり、猫をその身代わりとして手に入れ、小侍従に女三宮宛の手紙を託す。夕霧のように関心を広げはしない。ゆえに両者の惑乱は性質が全く違うのだ、とまでは言わないが、紫の上を光源氏の妻と捉え、理性をはたらかせる気持ちが柏木よりは強い点、六条院全体へ関心を広げていく点のように、光源氏の存在が思考に大きく影響している点において、夕霧は柏木と異なるとは言える。夕霧にとつて紫の上はあくまで理想的な六条院における女主人なのであり、夕霧の関心は紫の上を頂点とし光源氏に支配される六条院世界へ向けられるのである。

夕霧の垣間見が呼び起こすものは、紫の上への恋ではなく、父の宰領する六条院世界への憧憬である。夕霧にとつて紫の上は、六条院世界の象徴と言うべき存在なのであり、夕霧は彼女を思慕しながら、六条院を憧憬するのである。

二、垣間見以降の夕霧——光源氏への関心の変化——

夕霧は垣間見によって衝撃を受ける。その結果は、雲居雁のことさえ差し置いて紫の上の面影が忘れられないことや、それまで恋人を作ろうともしなかつたにも拘らず玉鬘へ求愛することなどにも現れているが、夕霧の場合には女性に対する感情の他にも変化したものがある。父に対する関心の持ち方である。

玉鬘への求愛に失敗した夕霧は、その直後に対面した光源氏に玉鬘の処置を問い詰める。この時、夕霧が抛り所にしたのは内大臣の言葉や世間の噂であるが、彼は野分の日に玉鬘と戯れる光源氏の姿を見ているし、玉鬘の素性が明らか

にされて光源氏との関係を理解した後では、玉鬘の美しさから六条院に面倒が起こりはしないかと心配している。

かの野分の朝の御朝顔は、心にかかりて恋しきを、うたてある筋に思ひし、聞き明らかめて後は、なほもあらぬ心地添ひて、(稿者注…光源氏は)この宮仕を、おほかたにしも思し放たじかし、さばかり見どころある御あはひどもにて、をかしきさまなることのわづらはしき、はた、かならず出で来なんかし、と思ふに、ただならず胸ふたがる心地すれど(三十三三〇)

光源氏が玉鬘へ恋心を持つていることを夕霧は知っている。

さて、玉鬘の素姓が明らかになった今、玉鬘の落ち着き先として挙げられているのが宮仕えに出ることと兵部卿宮へ嫁ぐことであるが、どちらが玉鬘にとつてふさわしいのかという夕霧の問いに光源氏はどちらとも答えない。その光源氏に対し、夕霧は言葉を繰り出す。

年ごろかくてはぐくみきこえたまひける御心ざしを、ひがざまにこそ人は申すなれ。かの大臣もさやうになむおもふけて、大将のあなたさまのたよりに気色ばみたりけるにも、答へたまひける(三十三三六)

光源氏自身が玉鬘に対しよこしまな気持ちを持つているのだと世間では言っている、と夕霧は言うのである。光源氏が一矢すると、今度は玉鬘を得るための具体的な手段にも言及しながら切り込んでいく。

内々にも、やむごとなきこれかれ年ごろを経てものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕の筋に領ぜんと思しおきつる、いと賢くかどあることなりとなんよろこび申される、と、たしかに人の語り申しはべりしなり(三十三三六・三三七)

夕霧の追及は鋭い。六条院にはすでに素晴らしい方がたがいるために玉鬘をその中に連ねることが難しいものだから、尚侍として出仕させ、その実我が物にしようというのではないか、という内容はかなり無遠慮であるし、「いと賢くかどあることなりとなんよろこび申されける」とは明らかに皮肉である。しかしもちろん、皮肉を言うことが夕霧の目的ではない。ここで夕霧が知りたがったことは、玉鬘の処置というよりは光源氏の真意である。夕霧は、光源氏の「気色の見まほしければ」（三十三三三六）ということことで玉鬘の件の追及をしたのであった。夕霧は光源氏の真意を知りたいためにわざわざ皮肉を言うのである。

紫の上を垣間見する際、何気なく覗いた妻戸の隙間からたくさんの女房が見え、そのままじつと見入ったというのだから、夕霧にはもともと六条院に対してある程度関心はあったのだろう。しかし、知りたいと思うことのために直接的な追及の形を取ることはこれまでなかった。夕霧の、光源氏の真意を知りたいと思う関心が強くなっているといえる。六条院を見た夕霧はまた、ただ憧憬するのみならず穏やかならぬ関心を持ち始めているといえるが、夕霧の場合にはその対象は紫の上ではなく、支配者たる光源氏に対しても向けられるものとなる。

三、柏木事件における父への追及と限界——「御気色」を見る夕霧——

知っている事柄を胸に秘めて光源氏へ迫るといふ夕霧の行動を、光源氏にとつてより深く重大な問題に対して関わらせられたものが、第二部以降の話の中心を占める柏木と女三宮の密通事件ではないか。

第二部において柏木が密通事件を起こす物語が語られる中での夕霧は、光源氏と柏木の中間に立つ、事件の観察者の役である。夕霧は親友柏木が恋をしている様子と、六条院に起こっている変化に視線を向け、気にかけている。

「若菜上」巻、女三宮が光源氏へ降嫁したことで、夕霧は女三宮の様子や人柄を自然に見聞きする。しかし夕霧は、おっとりした女三宮や派手好きな女房の様子と、それぞれに立派な六条院の他の女性達の様子とを比較し、「この宮は、

人の御ほどを思ふにも、限りなく心ことなる御ほどに、とりわきたる御けしきにしもあらず、人目の飾りばかりにこそ」(四―一三五)と考えている。夕霧は女三宮を取り巻いている状態についての射た認識を持つている。そしてこの直後の場面で、夕霧は女三宮を柏木とともに垣間見る。

夕霧にとつても女三宮は、かねて姿を見たいと思つていた対象であつた。しかし立ち姿を見せる幼稚さにむしろ関心は冷める。垣間見後に夕霧が気にかけているのは、外見は取り繕つてゐるが女三宮に目を奪われたであろう柏木である。この時夕霧は、「さらぬ顔にもてなしたれど、まさに目とどめじやと大将はいとほしく思さる」(四―一四二)と女三宮へ同情しつつ、「大将は、心知りに、あやしかりつる御簾の透影思ひ出づることやあらむと思ひたまふ。いと端近なりつるありさまを、かつは軽々しと思ふらむかし」(四―一四三)と柏木の心の推測をしている。女三宮を軽々しいと思つただらう、という推測である。ところが実際はそうではないので、この部分で夕霧は、柏木が受けた衝撃の深さについて正しく把握しきれてはいない。

しかしそうであつても、六条院から帰る車中で交わした会話によつて、夕霧は柏木が女三宮へ強く心を惹かれたことが分かつただらう。柏木は「院には、なほこの対にのみものせさせたまふなめりな」(四―一四五)などと「あいなく」(四―一四六)言い、夕霧がたしなめても、「いで、あなかま、たまへ。みな聞きてはべり。いといとほしげなるをりありあるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御おぼえを。ありがたきわざなりや」(四―一四六)と聞く耳を持たず女三宮に同情を寄せた。そこで「いで、あなあぢぎなものあつかひや、さればよ」(四―一四六)と夕霧は思うのである。その後物思いにふけりがちな柏木を見て、「なほいと気色異なり、わづらはしきこと出で来べき世にやあらん」(四―一五四)と自分のことのように心配するほどの強い恋心を柏木が持つたことを悟るのである。

そして月日が経ち、柏木と女三宮は密通する。光源氏がその事実には気が付き、柏木が六条院へ参上しなくなると、夕霧だけは何かあつたと勘付いている。光源氏は柏木を六条院へ呼ばないことを世間の人が不審がるだろうと推測しているが、それに反し、大方は柏木の病氣と六条院に催しがないことを合わせて考えてそれほど不審に思つていない。不審に思つたのは夕霧のみである。柏木事件に対する夕霧の観察者の立ち位置が現れているが、その彼にしても、この時点で

は何かがあつたと漠然と思つてはいるが、それが何かといふことは分かつていない。

しかし、柏木が遺言で光源氏との間に行き違いがあつたと告白したことや、女三宮の出家を光源氏が許したことへの不審を考え合わせることで、疑惑は夕霧の中で次第にはつきりとしたものになっていく。

女宮のかく世を背きたまへるありさま、おどろおどろしき御なやみにもあらで、すがやかに思したちけるほどよ、また、さりともゆるしきこえたまふべきことかは、二条の上の、さばかり限りにて、泣く泣く申したまふと聞きしをば、いみじきことに思して、つひにかくかけとどめたてまつりたまへるものを、など、とり集めて思ひくだくに、なほ昔より絶えず見ゆる心ばへ、え忍ばぬをりをりありきかし(四―三二五・三二六)

夕霧は疑い、柏木を批判する。

すこし弱きところつきて、なよび過ぎたりしけぞかし、いみじうとも、さるまじきことに心を乱りて、かくしも身にかふべきことにやはありける、人のためにもいとほしう、わが身は、いたづらにやなすべき、さるべき昔の契りといひながら、いと軽々しうあぢきなきことなりかし(四―三二六)

そして夢に現れた柏木が遺品の横笛を「末の世ながき音に伝へなむ」(四―三六〇)と言つたことを受けた夕霧は、横笛を持つて、薫のもとを訪れるのである。夕霧は推理の結果をこれと明確にはしていないし、薫を見て目もとなどが柏木に似ていると思ひ、父親の致仕大臣に知らせないのは罪作りだと思ひつつ、「いで、いかでさはあるべきことぞと、なほ心得ず思ひよる方なし」(四―三六五)と、まだ結論を下しかねている。とは言ふものの、夕霧は自らが辿りついた真実をほとんど確信しているだろう。

このように、「若菜上」巻から「横笛」巻にかけて、夕霧が段階を踏んで柏木の、延いては光源氏の秘密を推理する

過程が描かれているのである。

夕霧が以上のような推理を踏まえたうえで「横笛」巻末で光源氏との対話に臨んだことは、夕霧が単なる遺言の橋渡し役に留まらないことを意味する。しかも夕霧はこの件を質したいと思うとき、やはり光源氏の「御気色」を見たいと思っているのだ。

夕霧は「柏木」巻で、柏木の遺言と女三宮の出家のことを考え合わせ、事態の真相を推測しながら、

心ひとつに思へど、女君にだに聞こえ出でたまはず、さるべきついでなくて、院にも、また、え申したまはざりけり。さるは、かかることをなむかすめしと申し出でて、御気色も見まほしかりけり。(四―三三六・三三七)

と思う。また、「横笛」巻にも、

大将の君は、かのいまはのとちめにとどめし一言を心ひとつに思ひ出でつつ、いかなりしことぞとは、いと聞こえまほしう、御気色もゆかしきを、ほの心得て思ひよらるることもあれば(四―三五二)

とある。柏木のことを伝えようと思うとき、併せて夕霧が考えているのは、「御気色も見まほしかりけり」「御気色もゆかしき」ということなのである。

夕霧のこの感情は、「藤袴」巻において光源氏が明言を避けた玉鬘の処置について、その本心を質そうとした時のものと同じである。玉鬘の件を質す時、夕霧は光源氏へ世間の噂を利用して皮肉をぶつけた。今回の夕霧は柏木の遺言の伝達をしている。これらの対話において、夕霧は言葉の背後に自身の疑惑を潜め、追及によって光源氏の「気色」を知りたいとしている。対話の内容は違うが、夕霧の目的は同じである。

もちろん、夕霧が柏木の遺言を、言にくいながらも「せて聞かせたてまつらん」(四―三六八)と思う一番の理

由は、柏木への友情のためであろう。しかしその義務に加えて、夕霧には光源氏の顔色を伺つてみたいという自身の願がある。

しかし光源氏の抱える大きな秘密に迫ることができるといふ問題の重大さが、逆に夕霧の追及の妨げとなる。父や親友の名譽に関わる繊細な問題に、夕霧が手をつける必然性はない。夕霧に託されたことは柏木の遺言を伝えて取りなすということのみであり、それを超えた行動は夕霧の手に余るのである。

なかなかうち出でて聞こえんもかたはらいたくて、いかならむついでに、このことのくはしきありさまも明らかめ、また、かの人の思ひ入りたりしさまをも聞こしめさせむと思ひわたりたまふ。(四一三五二)

柏木の密通を察して、遺言を光源氏に伝えたいと思ひながら、言い出すのが「かたはらいた」いのは、重大かつ繊細な問題であり、自分が部外者であることをわきまえているからであろう。夕霧は機会を伺う。しかし横笛のことを聞いた光源氏の様子を見て「いとど憚りて、とみにもうち出できこえたまは」(四一三六八)ない。やはり言い出しにくいのである。それでも口に出したのは、少し前に触れた夕霧自身の欲求のため、そして柏木への友情のためである。遺言を伝えるという口実があるからこそ、夕霧は無遠慮な質問ができるのである。

夕霧が分からないふりをしながらも、その実真相を推理していたことは、光源氏も当然勘付いていた。夕霧が横笛のことを持ち出せば「この君もいといたり深き人なれば、思ひよることあらむかし」(四一三六八)と思ひ、続けて柏木の遺言のことを伝えられて「さればよ」(四一三六九)と思う。しかし光源氏はあくまで分からないふりで押し通し、夕霧は自身の願いはついに叶えないまま、柏木の頼みを果たし終え、追及の口実を失つてしまう。そして口実、延いては父と親友の秘密を追求する理由を失った夕霧は、それ以上強く押すことができない。はつきりとした答えもない光源氏に対して、夕霧は「うち出で聞こえてけるをいかに思すにかとつつましく」(四一三六九)思う。秘密に迫ってしまったことに対して気が引けるのである。そしてその後、薫の出生の秘密を詮索することをやめてしまう。結局夕霧は、

自身の欲求を果たさないうまま手をひかざるを得ないのである。

柏木の密通は第二部の中心的事件であるし、柏木の遺言を伝える夕霧は、その中で重要な役割を担っていると言える。夕霧は光源氏の秘密に迫るかに見えた。しかし結局は、夕霧の性格や立場が絡み合つて、核心には迫れない。夕霧にとつて光源氏は追及したいと思う存在であつても、実際に追及によつてその秘密を暴ける存在では決してないのである。

おわりに

夕霧は、紫の上を生涯慕い続け、六条院を憧憬する人物である。その一方、夕霧は光源氏の隠しごとと接近するといふ、挑戦者の面をも持っている。夕霧は見聞きしたことをもとに思考し、隠された事実を暴き、その結果を光源氏の「御気色」を伺いたいという欲求のために用いる。

しかしその行動は、例えば第二部において女三宮の降嫁や柏木の恋心が光源氏へかつての密通の応報を与え、理想的な六条院世界の秩序を破壊したような結果はもたらさなかつた。紫の上への恋心は自制し、熱心に探り当てた薫の秘密は胸の中に仕舞いこむ。六条院を憧憬し、光源氏について批評を下し、「御気色」を知りたいという欲求に基づいて行動するが、夕霧の追及は、光源氏世界の秩序を乱さない範囲に留まつたままだ。

結局のところ夕霧は偉大な父を尊敬しているのである。ゆえに少しの反発を感じながらも父によく仕えているし、父の名誉を損なうようなふるまいも行わない。思慮深く理性的な「光源氏の長男」が夕霧の役割である。

注

¹ 本稿における『源氏物語』本文の引用及び巻数・頁数は、新編日本古典文学全集（小学館）による。

² 伊藤博氏『野分』の後——源氏物語第二部への胎動』（『源氏物語の原点』明治書院、昭和五五年一月）

- 3 高橋亨氏 「可能態の物語の構造——六条院物語の反世界」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、昭和五七年五月)
- 4 塚原明弘氏 「まめ」(『源氏物語事典』大和書房、平成一四年五月)
- 5 高橋亨氏 「まめ」(『王朝語辞典』東京大学出版会、平成一二年三月)
- 6 辻和良氏 「夕霧——(等身大)の男君——」(『源氏物語講座 第二卷 物語を織りなす人々』勉誠社、平成三年九月)
- 7 注2、伊藤氏前掲論文は、この追求は「内大臣の言に託し、さらに『人』という曖昧な第三者を介在させて責任の処在をくぐらませながら、その実なによりも夕霧自身の鋭い牙をひそめている」とする。